

【地域教育実践報告】

小川町にぎわい創出課との連携による地域教育

——留学生対象「日本文化研修Ⅰ」における学外授業——

村越純子*

1. はじめに

内閣府地方創生推進事務局による都市再生プロジェクトでは、2005年（平成17年12月）に「大学と地域の連携協働による都市再生の推進」（第10次決定）が掲げられた。これは大学と地域の双方が好循環の関係を形成し、活力の源である人材の育成と創意工夫によって都市の再生を推進するという取り組みである。このプロジェクトは5つの項目から構成されており、その1つには、「留学生・外国人研究者等のための環境整備や市民とのふれあい・交流促進」が含まれている¹。

この「市民とのふれあい・交流」の場となる「地域」との連携を推進するために、すでに城西大学・城西短期大学地域連携センターが設置されている。本学の「地域との連携で目指すもの」とは以下の4つである。①大学での「学び」を通じた「地域」に貢献し得る能力と人間性を合わせ持つ人材の育成、②大学の「教育・研究」を通じた「地域」の実際的な課題の解決、③地域連携及び地域資源を活用した「教育・研究プログラム」の実施、④世界のどこにいても「地域」に対する意識を持って生きていく「地域志向」と「国際性」との融合、である²。

大学と地域との連携が求められているなか、本稿は、上述した本学の「地域との連携で目指すもの」のうち、③および④の実現、すなわち、地域連携のための留学生「教育プログラム」の実践例として城西短期大学開講科目「日本文化研修Ⅰ」の2020年度における教育内容を報告する。城西短期大学では、日本人を対象とした「日本文化研修Ⅰ」と留学生を対象としたものに分けられている。本稿で紹介するのは後者を対象とした集中授業形式でおこなわれた「日本文化研修Ⅰ」の内容である。

2020年度には新型コロナウイルス感染症拡大にともない、前期の授業は本学においても対面方式からオンライン方式に変更された。前期だけでなく後期でも、新型コロナウイルス感染症の拡大が心配されたが、幸いなことに埼玉県内の小川町にぎわい創出課の支援を得て、感染症対策を十分にとった

* 城西短期大学・准教授

1 内閣府地方創生推進事務局、平成17年12月6日第15回議事次第 資料1「都市再生プロジェクト（第十次決定）大学と地域の連携協働による都市再生の推進」には以下の5つの内容が示されている。「1. 大学と地域との連携の強化によるまちづくりの取組の推進、2. 実践的な社会人教育の推進や社会活動への参加促進、3. 留学生・外国人研究者等のための環境整備や市民とのふれあい・交流促進、4. 市民に開かれた大学、連続した緑地の確保などまちづくりと調和した大学キャンパスの形成、5. まちづくりへの取組に当たっての大学と地域との連携を促進するための体制整備」

内閣府地方創生推進事務局

(<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/tiiki/toshisaisei/dai15/15gijisidai.html>)（最終閲覧日2021年1月31日）

2 城西大学・城西短期大学地域連携センター「地域との連携で目指すもの」

(https://www.josai.ac.jp/lifelong/medical_welfare.html)（最終閲覧日2021年1月31日）

うえで学外授業を実施することができた。

以下では、まず「日本文化研修Ⅰ」で実施された体験型学習の目的と経緯を説明する。次に小川町でおこなった紙漉き体験や町歩き体験などの体験型学習の具体的内容について述べる。あわせて、学外授業のための事前学習として学内でおこなった授業内容と、学外授業における体験型学習の成果を示す。最後に、これらをふまえて大学と地域が連携することによって可能となる教育成果をまとめる。

2. 集中講義科目「日本文化研修Ⅰ」の概要

2.1 「日本文化研修Ⅰ」の目的

筆者が留学生を対象とした集中講義科目「日本文化研修」を担当するようになったのは2017年度後期からである。当時の「日本文化研修」は1年次配当の半期科目であった。城西短期大学に在籍する留学生に坂戸キャンパスを取り巻く地域で体験型学習をさせることによって、日本文化の理解を深化させることをめざしたものであった。

小学校から高等学校まで「特別活動」として実施される遠足や学校給食などは、日本人にとって「集団活動」の訓練の場でもある³。訓練を受けてきた日本人とは異なり、「集団活動」は留学生にとって必ずしも当たり前のことではない。留学生を対象とした体験型学習の実施に際しては、この点に留意する必要がある。同時に、この点が留学生の「日本文化」理解を助けるのではないかと考えた。そこで、望ましい「集団活動」（「特別活動」について学習指導要領のなかで指摘される学習内容）の意味するところが理解できる機会となるよう計画した。また、日本の教育基本法に示された人間観や、それに基づく学校における「道徳教育」の意味や目的を理解することは留学生にとって「日本文化」の理解につながると考えた⁴。

2018年度からは「日本文化研修」を充実させ、前期の「日本文化研修Ⅰ」、後期の「日本文化研修Ⅱ」とした⁵。それに応じて地域の文化財や地場産業を理解できるように授業内容を大幅に拡大させたが、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大の影響を考慮して、「日本文化研修Ⅰ」だけを後期に開講することとなった⁶。

3 小学校および中学校学習指導要領(平成29年告示)には特別活動の目標として、「様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を発揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決すること」が挙げられている。

4 村越純子(2017)「我が国の義務教育課程における道徳教育のあり方の説明モデル」『城西大学教職課程センター紀要』1, 5-21、および、村越純子(2019)「『道徳教育指導論』の授業のねらいと特徴」『城西大学教職課程センター紀要』3, 23-24、を参照。なお、筆者は城西大学の教職課程設置科目「道徳教育指導論」、「特別活動論」、「生徒指導」、「教育課程論」を担当している。

5 城西短期大学のカリキュラム改訂の一環として教授会で承認された。

6 2019年度前期の「日本文化研修Ⅰ」の学外授業は、高麗神社(4月27日実施)、小川町(6月1日実施)、越生町(6月29日実施)の3か所においておこなった。高麗神社では高麗神社宮司による高麗神社の紹介や本殿における学業成就祈願儀式の体験、小川町では埼玉伝統工芸会館および史跡巡り、そして越生町では名所・黒山三滝を散策後、地場産業が理解できる「うめその梅の駅」の見学、越生町立図書館で開架書籍閲覧、さらに「うちわ工房しまの」で代表者島野博行氏から名産品の一つである伝統的十文字団扇づくりの説明をうけるなどをおこなった。そして2019年度後期「日本文化研修Ⅱ」の学外授業は、小川町和紙体験学習センターにおける紙漉き体験(10月5日実施)と、上野の国立博物館訪問(11月16日実施、主に平成館特別展「正倉院の世界」見学)をおこなった。

2.2 小川町にぎわい創出課との地域連携までの経緯

2017年度の「日本文化研修」で学外授業の対象地域として、越生町と小川町を選択した。両町を選択した理由は、筆者が1994年4月から2000年3月まで越生町史編纂執筆委員として⁷、また2001年6月から2003年3月まで小川町史編纂執筆委員として⁸、自治体史を執筆し、また当該地域を対象とした研究に携わったことにある。当時、職員として自治体史編纂担当の中心的役割を担った新田文子氏と石川久明氏（その後それぞれの町の町立図書館長となられた）から小川町にぎわい創出課、越生町教育委員会を紹介いただき、地域連携が可能となった。

小川町にぎわい創出課には企業支援グループ、地域振興グループ、和紙普及宣伝グループ3つの部門がある。留学生対象の地域教育としてお世話になった和紙普及宣伝グループは主に小川町の産業振興を担う部門である。

3. 小川町での学外授業の実施内容

3.1 実施計画

2020年度後期実施の「日本文化研修Ⅰ」実施に際し、2017年度から毎年の学外授業でご支援をいただいている小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループ主幹の保田義治氏に相談した。昨年度までは前期と後期の2回に分けて行ってきた小川町での学外授業を、1日間（午前から午後までの工程）で行うことが可能かどうかである。

「和紙のふるさと」として有名な小川町には和紙体験学習センターがある⁹。同センターは本格的な手漉き和紙製作技術を学ぶことができる施設で、楮だけを使用した「細川紙」の製造技術を学ぶために全国から技術者が集まる研修施設でもある。和紙体験学習センターで留学生が紙漉き体験をするためには、新型コロナウイルス感染症対策として、約20人の受講生を2つのグループに分けて活動すること、そのために本学からの引率教員を2人にすることで実施可能であるとの連絡をいただいた。例年、学外授業は土曜日をお願いしてきたが、今年度は日程調整の結果、学外授業実施日を12月11日（金）とした。

提案された具体的な内容が表3.1に示されている。和紙体験学習センターでの「紙漉き体験」だけでなく、冬のこの時期にしか体験できない「楮の皮むき作業」、さらに「(和紙の)折り染め体験」が提案されている。表3.1にある「観光案内員」とは、小川町観光協会が実施している「おがわまちなか散歩ツアー」におけるボランティア観光案内の方のことである。この学外授業では受講生19人

7 村越純子（2000）「特徴ある越生高等小学校」, 越生町教育委員会編『越生の歴史Ⅲ〈近代〉』越生町, pp.454-495。このほかに筆者が携わった越生町の地域研究に関わる成果は以下のとおりである。村越純子（2001）「近代日本の農村における三年制高等小学校の性格－埼玉県越生尋常高等小学校高等科在学者の分析を中心に－」『中等教育史研究』9, 39-56。村越純子（2002）「国民学校特修科の性格に関する一考察－在学者の進路志望分析を通して－」『日本の教育史学』45, 142-161。

8 村越純子（2003）「大河公民学校第二部」「大河青年学校第二部」「大河国民学校特修科」, 小川町編『小川町の歴史 通史編（下巻）』小川町, pp.442-445, pp.448-449, pp.520-524。

9 埼玉県小川町公式サイト「和紙のふるさと 小川町」(<https://www.town.ogawa.saitama.jp/>)（最終閲覧日2021年1月31日）。

を2つのグループに分け、それぞれの活動を円滑におこなうために、「おがわまちなか散歩ツアー」の1時間コースをグループごとをお願いした。また、表3.1にある「かどや」とは、昼食場所とした小川町中心街にある割烹料理店「割烹角屋」のことである。今年度の学外授業は午前から午後にわたる活動のため、昼食先をみつけることが課題であったが、城西大学経済学部経営学科卒業生である関口久喜氏が経営する「割烹角屋」に受け入れてもらうことができた。

表3.1 小川町にぎわい創出課による提案内容

<p>城西短期大学の受入体制について</p> <p>期日 12月11日（金） 時間 11：00～16：00 人数 留学生19人 教員2人</p> <p>内容素案</p> <ul style="list-style-type: none"> ●19人を2チームに分割する。（9人+1人教授、10人+1人教授） ●紙漉き体験を1枚行う。当日持ち帰り。 ●人気の折り染め体験を行う。当日持ち帰り。 ●初めての取り組みだが、楮の皮むき作業を体験してもらう。 <p>具体的な動き</p> <table border="0"> <thead> <tr> <th></th> <th>Aチーム</th> <th>Bチーム</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>11：00</td> <td>町歩き</td> <td>紙漉き体験</td> </tr> <tr> <td>12：00</td> <td colspan="2">一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。</td> </tr> <tr> <td>13：00</td> <td>紙漉き体験</td> <td>町歩き</td> </tr> <tr> <td>14：00</td> <td colspan="2">一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）</td> </tr> <tr> <td>15：00</td> <td colspan="2">折り染め体験を行う</td> </tr> <tr> <td>16：00</td> <td colspan="2">終了</td> </tr> </tbody> </table> <p>町歩きについては、両チームとも、次のコースを想定しています。 これでよければ、観光案内員の予約を行います。 和紙体験学習センターもしくはかどや→青面金剛像（昔の風習）→馬橋（槻川と養蚕）→玉成舎（絹）→長屋（南裏通りと賑やかだった頃のこと）→メイン通り（江戸時代の市）→ヤオコー発祥の地→聖徳太子碑（神様崇拜）→和紙体験学習センターもしくはかどや</p> <p>費用</p> <p>体験 1500円（5枚）×4セット=6000円（当日持ち帰り 郵送料なし） 諸経費 折り染め用の和紙処理について 体験和紙を半切するので、19人分で体験和紙サイズで10枚が必要になります。この部分について、2セット分（3000円）の追加が可能かどうか、ご審議ください。</p> <p style="text-align: right;">担当：にぎわい創出課 和紙普及宣伝グループ主幹 保田義治</p>			Aチーム	Bチーム	11：00	町歩き	紙漉き体験	12：00	一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。		13：00	紙漉き体験	町歩き	14：00	一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）		15：00	折り染め体験を行う		16：00	終了	
	Aチーム	Bチーム																				
11：00	町歩き	紙漉き体験																				
12：00	一緒に昼食（かどや 1000円（税込み）の幕の内） かどやについては、11日の昼に対応可能とのこと。予約関係は保田が行いますが、支払いは当日お店でお願いします。																					
13：00	紙漉き体験	町歩き																				
14：00	一緒に楮の皮むき作業（11：30分小釜に火入れ）																					
15：00	折り染め体験を行う																					
16：00	終了																					

この提案（表3.1）をもとに、本学定例教授会（11月20日実施）で学外授業の実施計画を説明し、12月11日（金）の午前10時から午後5時までの学外授業を実施することが了承された。表3.1にある開始時間の午前11時とは和紙体験学習センターでの活動開始時刻である。小川町駅から小川町役場を経由して和紙体験学習センターまで徒歩で引率することを考慮して、小川町駅に集合する時間を午前10時20分とした。表3.1に示された教材などの必要経費および昼食代は授業の運営経費に含まれている。

小川町にぎわい創出課の保田義治氏との事前打合わせは11月30日（月）の午後1時から小川町和紙体験活動センター内でおこなわれた。午後2時から保田氏とともに、実際に小川町駅からの行程を歩くなど、確認作業を徹底した。とくに昼食場所となる「割烹角屋」ではご店主とともに入口から着席までの動線、全席前向きで間隔を開けた着席方法や配膳手順などを確認した。

3.2 学外授業のための事前学習

「日本文化研修Ⅰ」は集中講義科目であるため、通常授業15回分（今年度のみ1回80分）の授業総時間数を、「事前学習授業」6回分、「学外授業」5回分（12月11日実施）、そして「事後学習授業」4回分の合計15回に振り分けた。

第1回授業（11月18日4限実施）では、まず授業目的とともに、昨年度実施した学外授業を、写真などをみせながら説明した。つぎに受講生の主体的参加を促すことを目的として、受講生全員に留学生としてとくに疑問に思っている日本での生活習慣について発表してもらった。この発表をとおして、留学生が1列に並んで移動することや、一斉に食事を開始することなどに慣れていないことがわかった。

第2回授業（11月25日4限実施）では、小川町の伝統産業のひとつである和紙に関心をもってもらうために、「国際交流としての折り鶴－日本における平和教育－」と題して、視聴覚教材を用いた講義をした。その後、和紙でできた千代紙を配布して、受講生に実際に和紙を用いて折り鶴を作成する時間をもうけた。

第3・4回授業（12月2日4・5限実施）では、表3.1に示した内容を、留学生が理解しやすいように視覚教材にまとめ直した資料に基づいて、小川町へ学外授業にでかける目的や行動計画の詳細を説明した。現地では2つのグループ（班）それぞれが集団活動を円滑に行えるようにするため、グループ（班）ごとにメンバーを確認し、班長の役割などを説明したうえで班長を決定した。また定刻に遅刻することがないように集合することや、安全重視の観点から一列歩行で移動することの意味について説明し、また地図をみせて移動経路の確認をおこなった。留学生にとっては、集団活動は馴染みがなく実感がもてないとのことだったので、グループ（班）ごとにソーシャルディスタンスをとったうえで、まとまって座ること、一列に並ぶこと、そして班長の点呼、なども実際に練習した。

第5・6回授業（12月9日4・5限実施）では、第3・4回授業で視聴覚教材として提示したシートの一部を学外授業当日に学生が携帯できるように配布し、行動計画の再確認を行った。このときに留学生に配布した資料は付録1に示されている。付録1の最後の2つのシートには各グループの班長および班員の学籍番号と名前が掲載されている（個人情報であるため、付録1には書き込んでいない）。

教室内で班長を先頭に1列に並ぶ練習をした後に、そのまま屋外に移動して点呼の練習をした。具体的には、城西大学キャンパス内の7か所を点呼予定の7か所（小川駅前→小川町役場→和紙体験学習センター→「割烹角屋」→和紙体験学習センター→小川町役場→小川町駅）に見立て、一列に並んだ状態で班長が点呼をとり記録するなどの訓練である。また、新型コロナウイルス感染症対策として、和紙体験学習センターの「手すき学習室」への入室を学生5人に制限して紙漉き体験をおこなうため、室内の5人の立ち位置や退出方法の確認などもおこなった。

4. 学外授業における体験型学習の成果

4.1 学外授業当日を振り返って

12月11日に行った学外授業（第7回から第11回）当日は、留学生のゼミナールを担当する杵渕友子教授が同行した。筆者がAチーム（第1班）を、杵渕教授がBチーム（第2班）を引率した。履修登録した19人のうち長期欠席者1人を除く18人全員が予定どおり10時20分までに小川町駅に集合した。その後は表3.1のタイムテーブルに従って留学生を誘導した。

小川町にぎわい創出課のご配慮により、和紙の指導技術者が計画時の3人から4人に増員され、また観光案内員もAチーム（第1班）には1人から2人に、Bチーム（第2班）には1人から3人に増員された。とくにAチームを担当した観光案内員の方は、史跡や名所の写真とそれについての簡潔な説明が付された手作りカードに基づいて、拡声器マイク付きスピーカを使用して説明された。

昼食をとった割烹料理店「割烹角屋」では、幕の内弁当にお味噌汁やお茶なども配膳された。新型コロナウイルス感染症対策として留学生は全席前向きで着席して食事をとった。

小川町和紙体験学習センターでは参加者全員が紙漉きと折り染めを体験し、つくった作品を持ち帰った。



和紙体験学習センターでの紙漉き体験の様子



和紙の折り染め体験の様子

4.2 学外授業後のレポート作成と発表会

「日本文化研修Ⅰ」では、学外授業後に体験学習によって得たことや考えたことをレポートにまとめ、受講生全員が発表することを課題とした。留学生にとっては日本語によるレポート作成そのものが日本語学習の機会であるため、学内のパソコン設置教室において各自がレポートを作成する時間を

設けた。

学外授業後の第12・13回授業（12月16日4～5限実施）では、できるだけ多くの留学生が日本語・日本文化について質問できるよう、その結果をレポートに反映させられるように、城西大学・現代政策学部にも所属する教職志望の学生に学習支援を依頼した。当該学生には今年度だけでなく昨年度にも留学生の語学支援を依頼しており、留学生に評判がよかった。

第14・15回授業（12月23日4～5限実施）では、受講者に作成したレポートを発表させた。

4.3 学習成果

第12回授業のはじめに、小川町にぎわい創出課から依頼されたアンケートを実施した（「おがわまちなか散歩ツアー アンケート用紙」配付）。このアンケートは観光案内の資質向上を目指すことを目的としたものである。その内容は観光案内員の態度について、①説明の内容、②声の大きさ、③説明の速さ、④案内員の誘導（交通誘導を含む）、⑤案内員の印象についてそれぞれ5段階（「良い」「やや良い」「普通」「やや悪い」「悪い」）の評価を問うものと自由記述で構成されている。集計結果の概要は表4.1に示すとおりである¹⁰。留学生18人全員が「案内員の印象」について「良い」を選択している。自由記述部分には「全部いいと思う、ありがとうございます。説明は外国人もよくわかる、とても親切な案内員さんです。小川町の歴史は始めて知りました。見聞を広めたと思う。」や「案内員が説明してくれた内容が分かりやすく、内容が面白くて素晴らしい観光でした。お疲れ様でした。ありがとうございます。」など、多くの学生が観光案内員に対して感謝の言葉を述べている。

表4.1 「おがわまちなか散歩ツアー アンケート」の集計

質問項目	良い	やや良い	普通	やや悪い	悪い
①説明の内容	17	1	0	0	0
②声の大きさ	16	2	0	0	0
③説明の速さ	15	2	1	0	0
④案内員の誘導	17	1	0	0	0
⑤案内員の印象	18	0	0	0	0

* 数値は回答人数を示す。

付録2として、学生が作成したレポート2つを挙げた。レポート①の学生はAチーム（第1班）のメンバーである。レポート①を読むと、和紙体験学習センターでの紙漉き体験をきっかけにして、現代における和紙という伝統文化の意味に思いをめぐらせていることが分かる。ほかにも、和紙体験学習センターにおける「紙漉き体験」、「楮の皮むき作業」や「折り染め体験」で感動したことを詳しく述べるレポートがみられた。レポート②の学生はBチーム（第2班）のメンバーである。レポート②

10 小川町観光協会事務局によるアンケートの集計結果である。

のように、昼食をとった割烹料理店で配膳された和食や、「おがわまちなか散歩ツアー」体験をとおして小川町に残る文化財の保存状態に感動し、そのことを友達に伝えたい、または友達に紹介するためにいっしょに小川町に行きたいと書いている学生も多かった。小川町職員、和紙体験学習センターの技術指導者、そして観光案内員という小川町からの10人の支援者との交流があったからこそ、留学生たちは充実した体験活動ができたのだと思う。

5. おわりに

本稿は、地域連携のための留学生「教育プログラム」の実践例として城西短期大学開講科目「日本文化研修Ⅰ」を取り上げ、2020年度における授業内容を紹介した。授業を実施するにあたり、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から様々な制約が課せられた。「日本文化研修Ⅰ」の学外授業も危ぶまれたが、実施できたのは、小川町にぎわい創出課の支援を得て、十分な感染症対策をとることができたからである¹¹。また学外授業の教育成果として、留学生は訪問した地域の地場産業や文化財に強い関心をいだいただけでなく、日本の自治体がかつ地域の組織力なども理解していたように思う。訪れた留学生の多くが、また小川町を訪問したいと思えたことが、この地域の観光産業への貢献につながると考える。大学と地域の双方が好循環を促す関係を形作る継続的な信頼関係やその結果としての教育成果を確認することができた。このことがさらなる好循環を生み出してくれると確信している。



和紙体験学習センターでの集合写真
(各自が漉いた和紙をもって)

11 この背景には2017年度からお世話になっている、小川町にぎわい創出課和紙普及宣伝グループとの信頼関係があったと考えている。同グループによる感染症対策に配慮した行動計画の提案に基づき、「和紙体験学習センター」と「小川町観光協会」のご協力のもと、この学外授業が成立したのだと思う。自治体による安全対策があったことで、留学生は安心して紙漉き体験や町歩き体験などの体験型学習をすることができた。

6. 付録

付録1 第5回授業で配布した資料

「日本文化研修Ⅰ」
学内授業

12月11日実施
小川町での学外授業にむけて

2020年12月9日（水）

村越 純子

1

小川町の特産品「細川紙（ほそかわし）」

- 楮（こうぞ）のみで作るとても丈夫な和紙
- 2014年にユネスコの無形文化遺産保護条約「人類の無形文化遺産の代表的な一覧表」に「和紙：日本の手漉和紙技術」として登録
- 「小川町和紙体験学習センター」で紙漉き体験

2

小川町にぎわい創出課との地域連携活動

12月11日に支援して下さる方（6人）

- 小川町にぎわい創出課 保田（やすだ）さん
- 観光案内員 2人
- 小川町和紙体験学習センターの職員（技術者）3人

3

東武東上線 小川町駅 改札前での集合時間：**10時20分**

- ① 東武東上線 **池袋駅発 9時発 乗車**
(坂戸駅発 9時44分発 乗車)

小川町駅 10時10分着

- ② 遅刻者を待たず**小川町役場へ移動**(トイレ可能)
11時前に**小川町和紙体験学習センター**へ到着

4

交通安全対策：点呼後、一列で移動
(マスク装着)

- ① 第1班と第2班で**毎回間隔をとり一列に並ぶ**
【安全確保のために大事なこと】
- ② **第1班の班長**が点呼し、班長を先頭に一列で移動
- ③ **第2班の班長**が点呼し、班長を先頭に一列で移動

5

新型コロナウイルス感染症対策

第1班 と 第2班 は別行動

第1班：**町歩き**→食事→**紙漉き**→楮の皮むき→折り染め
(角屋) (小川町和紙体験学習センター)

第2班：**紙漉き**→食事→**町歩き**→楮の皮むき→折り染め

6

付録1 (続き)

小川町和紙体験学習センターでの注意

- 職員の方の指示に従うこと
- 火気厳禁：禁煙！（敷地内すべてで禁煙）
- トイレが 和式
(小川町役場でトイレ休憩あり)

7

紙漉き体験のときの立ち位置

8

角屋(かどや)でのルール (感染症対策)

- 「割烹角屋」
TEL:0493-72-0457
- クラスター発生防止対策
食事中に互いに話さない！
- 店主は 城西大学 卒業生

9

角屋 2階 和室 (全席 前向き)

10

第1班のメンバー (村越先生と移動)

1 村越	1班長		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		

11

第2班のメンバー (杵渕先生と移動)

2 杵渕	1班長		
	2		
	3		
	4		
	5		
	6		
	7		
	8		
	9		
	10		

12

付録2 学生によるレポート

レポート①

埼玉県小川町といえば和紙で有名な町だ。なかでも、丈夫で厚みがあるのが特徴の特産品“細川紙”は国の重要無形文化財の指定を受けているほどだ。その歴史は正確には定かではないが、一説によれば1300年ほど前にまでさかのぼれるのではないかとされている。数ある伝統産業のなかでも、和紙や絹、建具などが特に知られている。和紙の歴史は古く、1300年も前から和紙づくりが行われていたとのことである。和紙は、厳しい寒さと水が冷たいほど、いいものができるというたいへんな作業である。

センターではまずは、紙を漉くための道具の一つ、竹の説明を受けた。この竹製の簀を挟んで道具は完成した。続いて原料となる“ねり”の説明を受けた。和紙の原料は、楮とねっとりとしたトロロアオイという植物からとった液体である“ねり”と水のみだ。このトロロアオイの粘着力がポイントなんだそう。最初は簀をセットした竹を“ねり”の中に入れて、チャブチャブと上下、左右にふりながら簀の上に薄い膜をつくっていくイメージである。3～4回ほどゆすっていく工程を繰り返すと、簀の上にしっかりとした膜ができた。一人で紙漉きにチャレンジすると、原料をくみ込んだり、ふるい落としたりするタイミングが難しかった。原料をくみ込むタイミングを間違えると、和紙に波型ができてしまう。初心者の方はみんなできてしまうので心配しないで、と励まされたが、ダイナミックな波形が完成してしまった。均一にゆすることが、いかに難しいのかを肌で実感した。これも和紙の貴重なところであり、一枚一枚が手作りで作られている。新しいメディアが普及した今でも、紙の需要が増えている。しかし、人類はグリーン資源の減少やゴミの増加など地球環境の問題に直面している。和紙は経済的な面で洋紙とは比べ物にならないほど高い。多くの生活用品がプラスチック製品に譲られている時代に、和紙は伝統的な活動と趣味の世界に限って、その特殊な存在価値で人々に精神的な楽しさを与えている。

今回の体験はとても良くて、新しい知識をたくさん学びました。楽しかった。

レポート②

先週の金曜日の朝、私達のクラス全員は小川町駅に集合して、天気はとても良くて、太陽が暖かいと感じました。留学生たちはA、Bの二つの隊列に分かれていて、みんなが駅から小川町役場まで歩いていたときに、通りにはほとんど人がいませんし、店もほとんど営業していませんでした。ここには人が住んでいないのではないかと思います。とても静かな町でした。高齢者が住むにはとてもいいと思います。若者はにぎやかなところに住むのが好きでしょう。

センターに来て中に入ると、ほのかな香りがしました。案内員が説明してくれました。コウゾの原木を蒸かした匂いでした。みんなが挨拶した後、Aグループはまず周辺を参観しました。Bグループはセンターで製紙を体験しました。次は私の一番楽しみな部分です。自分で和紙を作ります。製紙の水は米を入れたかのように濃く、とても冷たい感じがしました。案内員がやってみせてくれるのを見ているときには簡単だと思っていましたが、自分でやるには力があるし、腰にも力が入ります。百年以上前の和紙で作った手帳に触れました。これは本物でした。

昼は城西大学を卒業した先輩が経営するお店で昼食をしました。フライドチキン以外の料理は初めてでしたが、本格的な和風弁当がおいしく、店内の窓も和紙でできていて、とてもきれいでした。

それから私たちは小川町駅の近くの歴史的な建物を参観しました。その中で180年前に営業していたホテルにとっても興味を持ってました。外観から見ると、もう長い時間が経っていますが、このお店は当時のある程度の賑わいを見せています。これらの古い建物と寺を見て、まるで何百年も前に戻っているようで、建物を保存することができるこんな完璧さにとても感心しました。多くの屋根のデザインと中国古代の屋根は非常に似ています。中国の道教から日本に伝わった仏像があります。青面金剛qi men kon goと言います。

家に帰る途中、今日の見聞を思い出しました。また機会があれば、学校の同級生や先生と一緒に校外を見学したいです。これはとても有意義な体験と思いました。